

底が突き抜けた」時代の歩き方 505

「小泉純一郎」という物語にしか関心がなかった「自己愛解散」

驚いたことに、産経新聞は今年の8月15日の朝刊の第一面に、三島由紀夫が35年前の昭和45年7月7日付産経新聞夕刊に書いたエッセイ「果たし得ていない約束」（「私の中の25年」の一回目）を再掲載している。この年の11月25日に彼は「楯の会」会員の学生たちと共に、東京市ヶ谷の自衛隊に乗り込んで割腹自決している。この文章の冒頭部と末尾部を、次に引用してみる。

《私の中の25年間を考えると、その空虚に今さらびっくりする。私はほとんど「生きた」とはいえない。鼻をつまみながら通りすぎたのだ。

25年前に私が憎んだものは、多少形を変えはしたが、今もあいかわらずしぶとく生き永らえている。生き永らえているどころか、おどろくべき繁殖力で日本中に完全に浸透してしまった。それは戦後民主主義とそこから生ずる偽善というおそろべきバチルス（つきまとして害するもの）である。

こんな偽善と詐術は、アメリカの占領と共に終わるだろう、と考えていた私はずいぶん甘かった。おどろくべきことには、日本人は自ら進んで、それを自分の体質とすることを選んだのである。政治も、経済も、社会も、文化ですら。》（冒頭部）

《25年間に希望を一つ一つ失って、もはや行き着く先が見えてしまったような今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、いかに俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに^{ぼうだい}膨大であったかに唾然とする。これだけのエネルギーを絶望に使っていたら、もう少しどうにかなっていたのではないか。

私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである。》（末尾部）

戦後25年を経た昭和45年は、太平安逸、奢侈遊惰な元禄時代^{しやしゅうだ}の再現といわんばかりに、自民党幹事長の福田赳夫（小泉首相のお師匠さん）が名づけた「昭和元禄」と呼ばれる時代だった。「今日でお別れ」（菅原洋一）、「走れコータロー」（ソルティ・シュガー）、「戦争を知らない子供たち」（ジローズ）、「夢は夜ひらく」（藤圭子）、「白い蝶のサンバ」（森山加代子）、「希望」（岸洋子）、「女の意地」（西田佐知子）といった流行歌が流れ、テレビでは「細腕繁盛記」や「時間ですよ」、「あしたのジョー」などが視聴率

を稼ぎ、‘モーレツからビューティフル、（富士ゼロックス）、‘どういうわけかキリンです。（キリンビール）、‘男は黙ってサッポロビール、‘ハヤシもあるでよ、（オリエンタル・スナック・カレー）のCMが、ブラウン管にひっきりなしに映しだされた。

社会的事象としては公害問題が深刻化し、よど号事件（3月）、安保条約自動継続（6月）、大阪での日本万国博（3～9月）、ナセル・アラブ連合大統領急死（9月）、アラブ・ゲリラのハイ・ジャック事件が続発した。また、「不幸の手紙」が蔓延し、若者の三無主義（無気力、無関心、無感動あるいは無責任）がマスコミによって大きく取り上げられた。

敗戦の匂いを引きずってきた戦後の過渡期を経て、高度経済成長を背景に大衆消費社会へとなだれこんでいく時代の決定的な転換期を見据えて、三島はこの文章を「遺言」として書いていたのだ。この文章のタイトルは「果たし得ていない約束」である。一体、なにが「果たし得ていない約束」なのか。文中にはこうある。《それよりも気にかかるのは、私が果たして「約束」を果たして来たか、ということである。否定により、批判により、私は何事かを約束して来た筈だ。政治家ではないから实际的利益を与えて約束を果たすわけではないが、政治家の与えうるよりも、もっともっと大きな、もっともっと重要な約束を、私はまだ果たしていないという思いに日夜責められるのである。その約束を果たすためなら文学なんかどうでもいい、という考えが時折頭をかすめる。》

もう一度、問うてみる。三島にとっての「果たし得ていない約束」とは、なんであったのか。《その約束を果たすためなら文学なんかどうでもいい、という考え》は、文学では「約束」を果たすことはできないということである。文学では果たせない「約束」とは、なにか。《私は何とか、私の肉体と精神を等価のものとすることによって、その実践によって、文学に対する近代主義的妄信を根底から破壊してやろうと思って来たのである。》

肉体のはかなさと文学の強靱との、又、文学のほのかさと肉体の剛毅との、極度のコントラストと無理強い^{かいり}の結合とは、私のむかしからの夢であり、これは多分ヨーロッパのどんな作家もかつて企てなかったことであり、もしそれが完全に成就されれば、作者と作られる者の一致、ボードレール流に言えば、「死刑囚たり且つ死刑執行人」たるものが可能になるのだ。作者と作られる者との乖離^{かいり}に、芸術家の孤独と倒錯した矜持を発見したときに、近代がはじまったのではなからうか。》

文中のこの最も難解な個所に、文学では果たせない三島の「約束」が煮詰まっている筈である。その「約束」は多くの人に理解されないだろうことが彼にはよくわかっているから、非常に限定して書かれている印象を受ける。私なりに彼のその「約束」を翻訳してみる。

文学にとって可能なことは、同じ度合いだけ文学にとって不可能なことを招き寄せている。文学にとって可能な領域において文学は有効であるにすぎない。では、文学にとって不可能な領域では有効たりえないこととは一体、なんであるのか。小説や戯曲をたくさん書きつづけるなかで、三島はその問いを膨らませてきた。つまり、「文学が許容する風景」のなかで言葉を紡ぎだせば紡ぎだすほど、「文学を拒絶する風景」を無視できなくなって

きたのだ。「文学が許容する風景」のなかで彼の精神が育成されてきたなら、彼の肉体は「文学を拒絶する風景」のなかで鍛えられてきた。したがって、《私の肉体と精神を等価のものとする》実践の途とは、「文学が許容する風景」と「文学を拒絶する風景」を等価なものとして同時に生きていく、ということにほかならなかった。

これは具体的にはどういうことであるのか。「文学が許容する風景」のなかで三島は一個の肉体をもった人間として登場し、逆に「文学を拒絶する風景」のなかでは一個の精神として輝きたい、ということであった。文学はいつまで自分が許容する風景のなかに引きこもって、のほほんとしていられるのか、という苛立ちが、《文学に対する近代主義的妄信を根底から破壊してやろうと思って来た》という言葉に滲みでている。文学に長年携わってきた者の忸怩たる思いであった。「文学が許容する風景」のなかで生きてきた三島からすれば、バランス上性急に「文学を拒絶する風景」の比重を大きくしなければならなかった。というより、文学が取り扱ってこなかった領域での行動、発言に体重を傾けていく必要に迫られていた。

《私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう》と三島が書いたとき、彼は自分と同じ文学者たちにむかって、「日本」がなくなりつつあるなかで、あなたがたはそのことから目を逸らせて、それでも「日本語」を使って小説やら戯曲を書きつづけていくのか、そのようにして生みだされた作品というものは一体どのようなものなのか、という問いを発しつづけていたのだ。「文学を拒絶する風景」に突き入ることのないような文学とは一体、なんなのか。この問いの上に立って三島は、文学が肉体を不可欠とし、肉体も文学を不可欠とする場所へと向かっていったといえる。

産経新聞が三島の35年前のこの文章を再掲載したのは、三島が予言したとおりに、《日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残る》という状況が加速するなかで、三島が命を懸けて果たそうとしてきた「果たし得ていない約束」を、彼が訴えてから35年後の、戦後60年のいま、日本人の一人一人は自分自身にむかって、日本の戦後社会にむかってどのような「約束」を果たしてきたのか、「果たし得ていない約束」を置き去りにしてきてはいないか、を問いかけたかったのだと思われる。だがそれは、小泉首相が郵政解散によって「小泉劇場」が開幕され、世の中が久方ぶりの面白さに沸き上がっている真っ最中であった。産経はこの小泉首相作、演出、主演の政治ドラマについて、日本が《無機的な、からっぽな、ニュートラルな》方向にいいよ転げ落ちていくことの危機を感じ取って、三島の文章を再掲載したのか、それとも逆に、小泉首相の「殺されてもいい」発言を後押しするためだったのか、あるいは、「小泉劇場」

をほとんど意識することがなかったのか、いずれであれ、三島の「遺言」が35年後の「小泉劇場」の開幕の時期に呼び戻されたことが非常に興味深かったといわねばならない。

もう一つ、驚いたことがある。それは、フランス文学者の蓮實重彦が今年の5月26日に高麗大・文化大學で行った講演の草稿を大幅に改稿した同じ題名の「喜歌劇とクーデタ」が、今回の衆院解散前の『文学界』（05・8）に掲載されていたことである。

《一つの数字に触れることから始めさせていただきます。それは、「75」という数字があります。普段はあまり意識されておりませんが、これはきわめて危険な数字なのです。

例えば、ある政府が提起する政策なりある立候補者が表明する政見なりが、有権者の「75」パーセントもの支持をえたとき、そこには、民主主義の危機が胚胎しているとみなけねばなりません。あるいは、そうした危険を宿命として内包した代表制度が民主主義なのだといふべきかもしれませんが、ときに肯定的な数字ともとらえられがちなこの高い支持率は、有権者の大半が思考を放棄することによってしか成立しえないものです。何についてであれ「75」パーセントもの賛同がえられるという事態には思考の頽廃が醜く顔を覗かせており、その集団的な賛意の表明は、合理的な思考による判断を大きく逸脱しているといわねばならないでしょう。実際、思考とはおよそ異なる何らかの不合理な力が作用していなければ、一つの政策なり政見なりが「75」パーセントもの支持を得ることなどまずありえません。危機意識からくる集団的な防御本能が時代の趨勢として広く共有され、ほとんど無意識の連帯となって人々の思考を停止させているのでないかぎり、そうしたことはまず起こりえないはずなのです。

にもかかわらず、政府の政策が「75」パーセントを超える異常に高い支持を得るといった事態が今日でも頻繁に起こっています。例えば、「9・11」の同時多発テロの直後の合衆国大統領ジョージ・W・ブッシュ氏の対外政策は、それ以上の国民から支持されました。マスメディアまでその風潮に同調し、それを煽りたてていたように思えます。確かに、ごく少数のアメリカ人はブッシュ氏の政策に異議をとなえはしましたが、そのわずかな声がほとんど思考停止に陥った「75」パーセントにとどくはずもなく、「テロとの戦争」といういかかわしい大義名分が国民にあっさり受け入れられてしまいました。フランスがそれに同調しなかったことから、一部のアメリカ人が「フレンチ・ポテト」の呼び方の変更を真剣に考えようとしたことなどいまでは笑い話ですらありませんが、「75」という数字の効果は、一時の熱狂がさめてもよほどのことがないかぎり一年や二年は平気で居座ってしまう。その高い支持率が誤りだったと人びとが気づくには、数年の歳月が必要とされるのです。

それとほぼ同じことが、ごく最近、日本でも起きておりました。2001年4月に、与党の党内基盤が極めて弱い小泉純一郎氏が大方の予想を裏切って内閣総理大臣の椅子についたとき、その支持率は「75」パーセントを遥かに超えていました。それは、およそ実体を欠いた小泉人気なるものが、有権者の思考を停止させてしまったことを意味

しております。あるいは、支持という言葉の意味とはおよそ無縁の無批判な同調が時代の趨勢として行きわたってしまったといえるのかも知れません。日本によくある「調整型」の政治家とは異なる小泉氏をよくいえば思いきった——悪くいえばいいささか思慮を欠いた——言動がどこか目新しく映ったことは確かですが、政治的には未知数というほかはない彼にこれほどの人気が集まるとは誰にも予想できませんでした。新聞やテレビも圧倒的な小泉人気に同調し、その結果として「ポピュリズム」的風土ともいうべきものが醸成されてしまったのは否定しがたい事実です。「75」パーセントを超える支持率が危険な徴候であると口にすることすらためられるほどの首相に対する国民の熱狂ぶりは、明らかに異常でありました。こうした異様に高い支持率はしばしば立法府の権威そのものを低下させるものですが、ごく曖昧な概念にすぎない「国民」なるものの支持を大義名分として、この首相はきわめて問題の多い東アジア政策を推進することになったのです。だが、ここでは、ブッシュ氏や小泉氏の政策そのものを批判することが問題ではありませんから、危険な数字としての「75」の考察に戻ります。

例えば、植民地政策の破綻によるアルジェリア危機に見舞われていたフランスの1958年9月の国民投票における「79.25」パーセントのド・ゴール支持もまた、異常な事態だったというほかはありません。具体的には「第4共和制」の憲法の見直しの是非を問うものだったのですが、それが圧倒的に支持され、きわめて異例なかたちで「第5共和制」が発足することになりました。その背後には、救世主ド・ゴール將軍という神話的なイメージが作用しており、混乱よりも安定を選ぶという防御的な姿勢の共有により、大多数の国民の思考が機能停止に陥っておりました。そうでないかぎり、立法院の存在をほとんど無視して、憲法の見直しが80パーセント近い賛成票を獲得することなどまずありえません。

「75」が危険な数字として機能するのは、それが、政治家たちに、立法院の存在を無視して直接投票による国民からの支持獲得への誘惑を煽りたてるものだからなのです。とはいえ、「75」パーセントを超える国民の支持は民主主義にとって危険な徴候だから、直接的に民意を問うことはすべからず無意味だといいたいものではありません。ここで検討してみたいのは、その危険な「75」という数字の起源にほかなりません。それは、正確に歴史的な日付を持ったできごとからきているのであり、その歴史性は、21世紀に生きるわれわれにとって、なお同時代的なものたりえているからです。》

以上は冒頭部であり、《危険な「75」という数字の起源》が以下に検討されていくのだが、選挙において《有権者の「75」パーセントもの支持をえたとき、そこには、民主主義の危機が胚胎して》おり、《有権者の大半が思考を放棄することによってしか成立しえないもの》で、《実際、思考とはおよそ異なる何らかの不合理な力が作用していなければ、一つの政策なり政見なりが「75」パーセントもの支持を得ることなどまずありえません》という指摘が、全く無関係な時期であったにもかかわらず、今回の強

引な衆院解散がもたらした小泉政権の圧勝に対する見事な評言となっている。更に、『「75」という数字の効果は、一時の熱狂がさめてもよほどのことがないかぎり一年や二年は平気で居座ってしまう。その高い支持率が誤りだったと人びとが気づくには、数年の歳月が必要とされる』という指摘から、まつりの後で気づく思考ではなく、まつりの真っ最中に気づかれる思考こそが問われていることを引き出すこともできる。

数年の歳月を経過してから気づいても、すでに『「75」という数字の効果』が居座ってしまっている以上、遅いのだ。後からではなく、そのときに気づく思考でなければ、いつだって役立たない。思考というものは、いつ、どこで発揮されなくてはならないのか。もちろん、まつりの渦中であり、問題そのものの渦中においてである。そのときに思考を放棄している人々は、平素から思考を放棄しているか、あるいは思考の量があまりにも乏しい人々であろう。思考というものは「そのとき」を捉えるためにこそ、平素から鍛えられ、最大限に発揮されなくてはならないものなのだ。《思考とはおよそ異なる何らかの不合理な力》、すなわち、熱狂の類たぐいのようなものに押し流されてしまうような思考というものは、強力な風圧に耐えることのできない、真空管内で培養された思考にほかならないだろう。

《こうした異様に高い支持率はしばしば立法府の権威そのものを低下させるものですが、ごく曖昧な概念にすぎない「国民」なるものの支持を大義名分として、この首相はきわめて問題の多い東アジア政策を推進することになった》という指摘もまた、講演の中での次のような個所と重ね合わせて把握すると、我々が国政選挙のときにのみ、平素は恐れてしまっている「国民」として投票所に駆りだされ、帰宅後は自分の買った馬券の結果を確かめるように、テレビでレース模様を眺めて当落を知り、その後はいつものように「国民」であることを忘れた人々の一人に還っていくといった、そのような「国民」であることの存在様式に対する根底的な疑問が湧き上がってくるのを禁じえない。「国民」というフィクショナルな概念は、講演のなかに次のように登場してくる。

「娯楽とは、後期資本主義社会下における労働の延長」にほかならぬと分析する、フランクフルト学派のマックス・ホルクハイマーとテオドル・W・アドルノは、『機械化された労働過程を回避しようと思うものが、そういう過程に新たに耐えるために、欲しがるもの』として複製技術が可能にする映画やレコードによる娯楽を定義し、フォーディズム的な大量生産に従事する労働者と、映画やレコードを可能にする文化の規格化をパラレルのものと見なすが、資本主義的な文化産業が「消化によい快楽」としての娯楽を、『複製技術が可能にする映画やレコード』等の領域で開花させたとき、その「消化によい快楽」の真の消費者は、もはや工場労働者に限定されず、その域を超えて登場しつつあった。

《そうした「複製技術時代」の文化産業の消費者は、あくまで「国民」でした。そして、その「国民」という概念の階級を超えた曖昧さが、「第2帝政」期のフランスにせよ、1930年代の合衆国やソ連にせよ、その時代の政治にも色濃く反映していたのです。危険

な数字としての「75」を支えるのは、この「国民」という曖昧な概念にほかなりません。

クーデターを準備していた大統領ルイ・ナポレオンとその義弟のド・モルニーが相手にしていたのは、階級ではなく、あくまで「フランス国民」でした。その大統領令が、「フランス国民」の名において公布されていたことを見落としてはなりません。1848年のルイ・ナポレオンは、国民議会の席で、口頭で「フランス共和国」憲法への忠誠を誓ったのですが、その誓いを破ってまで彼がクーデターを実践したのは、間接選挙によって象徴される「フランス共和国」より、まさに「フランス国民」への忠誠が重要だという論理——それがどれほど身勝手な論理であろうと——を構築しえたからにほかなりません。彼らは、危険な数字としての「75」が、直接投票としての「フランス国民」という曖昧な集団にゆだねられることに賭けたのです。》

ここで「国民」とは一体、なにか、などと大上段に振りかぶらなくとも、「国民」の不真面目さに調子を合わせて、「消化によい快楽」を消費することさえできるなら、なんでも消費してやるという、「娯楽としての国民」のイメージが迫りだしてくる。なによりも、そのときの口当たりのよさを大好物とする「国民」のなかから《危険な数字としての「75」》が生みだされてくるということだが、そうすると、我々の思考は自分が「国民」として存在させられる、あるいは投票所（だけでなく、どこか）へ「国民」として駆りだされるときにこそ、最大に発揮されねばならないことになるだろう。一人のときはそれなりに考えていても、「国民」として行動するときは集団思考に埋没するありかたそのものが、《危険な数字としての「75」》が爆発する源泉になりえていることへの、思考の不断のチェックが問われているとして、だがそれ以上に……。

蓮實重彦のこの講演内容は極めて示唆に富んだ、興味深い指摘を次々とたぐり寄せている。とくに嫡子のルイ・ボナパルトの義弟ではあるが、私生児であったド・モルニー伯爵がルイ・ボナパルトのクーデターで果たす役割や、彼がおそらく台本の作者としてもかわり、主催した喜歌劇など、興味は尽きない。しかし、ここでの本題はあくまでも「小泉劇場」なので、それにかかわってくる個所のみに限定して取り上げておきたい。

一つは、《植民地政策の破綻によるアルジェリア危機に見舞われていたフランスの1958年9月の国民投票における「79.25」パーセントのド・ゴール支持》の異常な事態は、10年後に「68年5月」のパリ革命を惹き起こし、《ド・ゴールに対して表明した「75」パーセント以上の高い国民の支持は、10年後にその矛盾を露呈させることになった》という見解である。

もう一つは、ルイ・ナポレオンについてである。《王政復古のフランスでは、ナポレオン家に属する人物はことごとくフランス国籍を剥奪され》て、《亡命者として国外に暮らすことを余儀なくされており、その意味でルイ・ナポレオンは純粋なフランス人では》なかったにもかかわらず、《二月革命後の大統領選挙で、大方の予想を裏切り、ほぼ「75」パーセントの得票をえてフランスの初代大統領に選ばれてしまった。共和派

の政治家ルドリュ・ローランや名高い詩人ラマルティエヌなども立候補していながら、首都の政界ではほとんど無名といってよいルイ・ナポレオンが当選してしまったことから、歴史の歯車が狂い始めます。その歴史の歯車は、たんにフランスの「第2帝政」期というにとどまらず、「近代」と呼ばれる19世紀、20世紀の社会全体を狂わせたといえるべきでしょう。もっとも、ルイ・ナポレオンへの支持率は正確には「74.2」パーセントだったのですが、この圧倒的な勝利が、三年後のクーデタを準備することになるのはいうまでもありません。大ナポレオンの凡庸な甥として嘲笑され、マルクスからは「代用ナポレオン」と呼ばれ、国外に亡命した詩人ヴィクトル・ユゴーからは『小ナポレオン』という詩集まで送られることになるのですが、そのルイ・ナポレオンがクーデタの直後に国民の信任を問うと、これまた「75」パーセントを超える有権者から支持されてしまいます。

この信任が直接投票によるものだったことから、「75」パーセントという数字の近代国家における危険性が、国民の支持のもとに初めて確立されたことになりました。「第2帝政」は、立法院の存在を無視し、いわば直接的な民意によって正当化された「独裁体制」でした。当然のことながら、「帝国」の新憲法は、国民から支持された皇帝によって起草されることになり、議会制民主主義の間接代表制がそれにかかわることはありませんでした。こうして、19世紀から21世紀にかけての人類は、共和国においてすら、その種の「独裁体制」への萌芽をつねにはらんだ権力機構のもとで暮らすことになったのです。》

1848年の二月革命後にフランスに帰国したルイ・ナポレオンは、《ボナパルト帝国の再興をめざしてストラスブールやブローニュで何度か無謀な挙兵を試みておりますが、そのつど捕らえられて国外に追放されたり、牢獄に幽閉されたりしております。大革命から半世紀が経過しているフランス国民のほとんどは、この大ナポレオンの甥を時代錯誤の誇大妄想狂と見なし、文字通り滑稽な存在として軽視していました。ところが、ナポレオンという名前の神話的な威光は民衆的な無意識の深部に生きており、彼はフランスの初代大統領に選ばれてしまいます。》

その三年後に、「フランス国民の名」において国民議会の解散、総選挙の実施、戒厳令の公布を宣言した大統領令を発するクーデターを行ったその翌朝、《パリ市民は、すでに起こった既成事実としてクーデターを受け入れざるをえ》ず、《それに激高した国会議員がヴィクトル・ユゴーを中心に「ルイ・ナポレオンは裏切り者だ。……武器を取れ」という決起文を書きはしますが、印刷所は封鎖されていたのでどうすることも出来ず、街頭における大がかりな民衆の蜂起もないまま——一時的に築かれたバリケードは、軍隊によっていくぶん手荒に排除され——クーデタはあっさり成功》する。

蓮實重彦の講演によって、《「75」が危険な数字として機能する》、その起源の歴史的事件をみてきたが、今回の9.11選挙によって自公連立政権で衆議院の3分の2を

超える議席を獲得した結果、「国民」は小泉政権に完全に白紙委任をしてしまったという意味で、数字は異なっても「75」パーセントの危機と同じ危機に日本国民が見舞われていることには変わりはない。「小泉劇場」は解散の二日前、8月6日の夜、森喜朗元首相がひとり訪れた公邸を出て来たときの、あの「干からびたチーズ」を手にして、「殺されてもいい。郵政民営化はおれの信念だ」の小泉発言を世間に大っぴらに喧伝した時点で開幕したとみられ、衆院解散直後の記者会見で小泉首相が、「約400年前、ガリレオ・ガリレイは、天動説の中で地球は動くという地動説を発表して有罪判決を受けました。そのときガリレオは、それでも地球は動くと言ったそうです」と大きく一発カマシて、「民営化反対は天動説のようなもので、衆院選で国民が自民・公明に過半数を与えてくれたら、参院も民営化賛成に変わる」などと、無茶苦茶な論理を恥ずかしげもなく披露したことで、素人田舎芝居は「国民」の前ではっきりと上演されることになった。

この小泉表明に注目したのは、作家の佐木隆三であり、文芸評論家の福田和也である。《地動説イコール少数派であり、時の権力に対して信念を曲げないことを意味する。絶大な権力を有する首相が、「自分は少数派で窮地に陥っているから、皆さんが選挙で助けてください」と懇願するのは、滑稽というほかない。このため世論調査が大きく首相支持に傾いたのであれば、これが「天動説」だろう》と述べて、『世界週報』（9.13）で佐木隆三は、彼が追跡しているあの、おぞましく身の毛がよだつ「北九州連続監禁殺人事件」に言及する。死刑を求刑されている、7人を殺害したとされる松永太・緒方純子両被告のうち、今年の5月18日の最終陳述で、松永被告は次のような長広舌を振るったそうである。「私が純子に親族の殺害を指示したとする検察官の主張や、従犯の純子の死刑は回避すべきだという論調は、天動説の信者のようなものだ。この裁判はイメージが先行しており、諸悪の根源は松永と決め付けている。裁判は証拠に基づいて判断されるべきで、私が殺害を指示したことを裏付けるものはない。かつてガリレオ・ガリレイは、無知蒙昧な天動説によって地動説を葬られた。この恐るべき宗教裁判のように、無実の私に死刑判決を下すようなことは、絶対に許されないのである」

刑事被告人の立場を外して聞けば、先の小泉表明と似通った達者さがそこに読み取れる。《結婚詐欺師でもあった松永太被告は、とにかく弁が立》ち、《ポピュリズム（大衆迎合）の最高権力者が、3ヵ月前に福岡地裁小倉支部で、自らをガリレオ・ガリレイに擬した刑事被告人がいたことを知っていれば、芝居じみた「天動説」など持ち出さなかったのではないかと》と揶揄するが、《芝居じみた「天動説」》を持ちだすもなにも、小泉首相もこの刑事被告人と同様に、《大事なのは地動説でも天動説でもなく、ガリレオとして語ること》であり、《自らをガリレオ・ガリレイに擬》すること自体が狙いだったのだ。そう看破するのは、福田和也である。彼は、「小泉純一郎は誰が為に死す」（『文藝春秋』05.10）なる一文で、こう書いている。

《8月8日午後、参議院で郵政民営化法案が否決された直後、首相官邸から出て国会に

向かう小泉純一郎総理は、待ち受けていた記者団にたいして満面の笑みを浮かべて見せました。これほど嬉しそうな顔をした小泉総理の顔は見たことがありません。一体、今日、誰がこのような、喜びに満ちた笑顔を見せることができるだろう、と訝しくなるような会心のものでした。私は、名伏しがたい畏れのようなものを感じました。観た者すべてが石になるという魔女ゴルゴンの顔とはこのようなものではないか、と。実際、この日以来、政界は、そして日本社会は、魔の一瞥によって凍りついてしまった、まったく別のものになってしまいました。

もしも、小泉氏が、かねて主張するとおりに郵政民営化する政策を実現したいと熱望しているのだとすれば、参議院で否決されたことは、大変残念なことでしょう。あらかじめの票読みで不可能だと分かっていたとしても、一抹の悔しさ、憤懣が現れるはずですし、強がって笑顔を見せたのなら、どこかに強張りがあるはずですが、そんなひっかかりはどこにもない、まさしく会心のものでした。田勢康弘氏によると、衆議院で5票差で可決された時、麻生総務大臣に「もうちょっとで選挙できたのに惜しかったですね」と声をかけられて、真顔で肯いたそうです。（「郵政総選挙『小泉勝利』の予兆」『Foresight』9月号）。

このような話をきくたびに、郵政民営化などは、あるいは個々の政策などは、小泉純一郎氏にとってはどうでもいいことなのではないか。自民党もどうでもいい、ただ劇を、自らのドラマを演じることができればそれでいいのではないか、という思いが湧いてきます。》

続いてガリレオ発言に移り、政治家小泉純一郎には興味がないが、人間小泉純一郎が《今日の日本人の一つの典型、つまり徹底して自己愛にとりつかれた人間であり、しかもそれを貫徹することに成功している》ように見えるところに、《深甚たる興味がある》という。自己愛の強さとは我が身可愛さではなく、《小泉総理は、いつでも自分の生命を投げ出す覚悟がある》のが確信され、《ただ、それは国のためでも、国民のためでもない、「小泉純一郎」という物語のためではありますが、カエサルのように、リンカーンのように、浜口雄幸のように殺されるのであれば、小泉氏は喜んで身体を刃の前にさらすでしょう。しかしそれは奴隷制廃止のためでも金解禁のためでもない、リンカーンや浜口と並ぶ命運を生きるためにほかならない》。ガリレオであれ、信長であれ、歴史上の偉人に自らを擬する傾向が凄まじく、政策実現や予算獲得に奔走する政治家とは異なっていて、《小泉氏は、自分のドラマを生きるために政治家をしているのではないか》とみる。

《そこに「変人」の「変人」たる所以があり、小泉総理に政治家たちが翻弄され、右往左往する要因があるのです。つねづね「俺の葬式には誰も来なくていい」と広言しているという小泉氏は、鳥中の蝙蝠であり、他の政治家とはまったく異なった原理で生きている》。もちろん、誰にも自己愛はあるし、《自分のドラマを生きたいという欲望》をもっているが、複雑な現代社会のなかではその実現は困難であり、それ故にこそ、《自分の役を演じきっている》彼に面白さを感じ、人気が集まると指摘する。《小泉流の賛成か反対かの二者択一》の単純さや「女刺客」や「ホリエモン」のくだらなさば《誰もが

知っている》けれども、《どんな無内容なものであっても、自らの役柄を、つまりは宿命を生きている》小泉総理が繰り出す白か黒かの手口に、《ドラマと無縁なネゴシエーターたちがうろたえることが愉快でたまらない》。彼の《宿命の前に、現実が敗北する劇に国民は喝采している。国民にとっても、郵政民営化などどうでもいい。日本経済だってどうでもいいのです。有権者として、小泉シアターに参加することのほうが重要なのです。》

彼がいかにして自らの《宿命を生きるようになったのか》については簡潔に説明されているが、小泉家三代の《血と執念によって作りだされた宿命を生きる》ことが、彼にとって《政治家になり、総理大臣になることの最大の意義》で、個々の政策実現や権力掌握は、《宿命を生きるといふことの付随物にすぎません》。もちろん、《みずからの劇を演じることだけを追求してきた》《こういう人物が、総理大臣であるというの、かなり奇怪なことであると同時に、恐ろしいことでしょう。国家の舵取りをする人物にとって、最大の関心が自らの役柄を演じるといふことなのですから。けれども、だからこそ、つまり面倒な現実をすべて切り捨ててしまう爽快さがあり、この無内容だけれど、面白い劇に、自己愛を追求しきれない私たちは、日々喝采を送るしかないのです》と両手を挙げるようにして締め括る。

いうまでもなく自己愛を徹底する小泉首相のドラマに我々国民が協力する必要は全くないし、勝手に自らの宿命を生きてくれ、ただし一国の総理としての果たすべき役割とは混同しないでくれ、ということはある。しかし福田氏がいうように、総理として自己の宿命を生きようとし、そこに国民が喝采を送る理由があるのだから、どうすることもできない。彼にとって郵政民営化などどうでもよかったとしても、大事なものは、いかに無内容で空疎であろうとも、「改革」の旗標^{じろし}を高く掲げて突進するイメージであった。自らのドラマはそのイメージに包まれて演じきられる必要があったのだ。同様に三島由紀夫という物語を演じきった三島は、《無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない》経済大国の日本で、このような「小泉劇場」に国民が殺到する光景を予見していたのではなかつたらうか。

衆院解散をやりたがっていた首相の願望が実現したとき、すでに国民は彼が演じるドラマを見守る観客に変わっていたし、彼がその観客にむかって「イエスかノー」とのみ突きつけて、自分の1票が結果を左右するという、日本の選挙史上初めての「直接選挙」に加わることでできる権利を有していることのスリリングさと興奮を「国民」として感じ取ったとき、どちらに投票するにせよ、あるいは投票所に行かなかった場合でも、誰にとってもこの「小泉劇場」の外に出ることは困難であった。さて、田舎芝居は終わったのかどうか、どこまでも自分の物語を追求してやまない小泉首相に、「国民」はもっと面白いドラマを求めつづけるのか、それとも劇場の外に出て自分の物語を演じきれない浮かぬ顔で、空騒ぎの空虚を嘯みしめているのだろうか。

2005年9月26日記